

黑小虹

阪神大震災遺児たちの一年

黒い虹

あしなが育英会・編

筑波大学副学長
副田義也・監修

廣濟堂出版



黒い虹

秋元かつひと(小学5年)

「かすみのつどい」で絵をかきました。
「きれいなじ」をかきました。

青と黄色のにじをかきました。

月をかいて、空を黒くぬりました。

ぼくをたすけてくれた、お父さんのことは、

夜におもいだします。

よくこわいゆめをみます。

いつもおねえさんが、大きいこえでおこして

たすけてくれます。

学校でともだちに、よくどつかれ

いじめられます。

でもブランコやスベリだいが大すきです。

べんきょうはきらいだけれどしゅくだいは

ちゃんとしていきます。

お父さん、てんごくでいてください。

友と遊ぶかつちゃん(写真後列の右側)は底抜けに明るい
が、心にかかる「黒い虹」を
描く。

一家8人が家屋のしたじきに。
父親と末娘が亡くなり、母親
と5人の子どもが遺された。
一家は母子寮に移ったが、母
親は一時体調をくずし入院。
中3の姉カズミさんは進学資
金を心配する。



黒い虹

— 阪神大震災遺児たちの一年

喪失体験の悲痛な心の叫び

あしなが育英会会長代行 玉井義臣

かっちゃん(小五)は、この夏、海のとどいで、「黒い虹」の絵を描いた。月と星をちりばめた空に、虹の橋を架けた。緑、青、赤、黄の四色で彩ったあと、赤を上から黒ペンキで塗りつぶした。夜空に黒い虹だ。彼の作文には「夜、よくこわいゆめをみる」とある。

アンケートでは、親は「自分を助けるために死んだ」「すまない」と二人に一人の子が自責の念にかられている。三人に二人は地震を「いつも思い出す」「ときどき思い出す」という。

死にたかった。そしたら、お父さんもお母さんも助かったかも、と中学生は書いた。

僕らは、改めて震災遺児(五百六十九人確認)の心の傷の深さに打ちのめされた。そこで、一九九五年八月下旬から、あしなが育英会は震災遺児家庭の実態調査に入った。副田義也筑波大学副学長(社会学)の指導で、遺児学生と一般のボランティア学生がペアを組んで、二百四世帯を訪問し、保護者から話を聞いた。本来なら他人には聞かせたくない話なのに、お願いした家庭の七割が調査に応じてくれた。遺された方の父親も、母親も、祖父母らも、セキを切ったように胸につかえる思いを二時間も三時間も語った。共通体験をもつ遺児学生が聞き手だったからだろうし、あしなが育英会の半年間の取り組みに信頼と期待を寄せてくれたからかもしれない。

学生達は原稿用紙十枚ぐらゐの報告書にまとめた。一読して唸った。僕は、遺児救済の社会運動に携わつて三十年、遺児のことは知ってるつもりで、実は何も知らなかったのではないか。一つ一つの家族が阪神大震災のあの瞬間から、生と死を分け、その後一日一日をどんな思いで生きてきたか、子だけが心に傷をもつのではなく、遺族一人ひとりの人生もめちやめちやに破壊されている様相が、読む人の心に重くのしかかる。二百家庭には二百通りの苦しみ、悲しみ、つらさがある。安直に話せないし、書けない。忠実にまとめ、読んでもらうことが逝つた方々への鎮魂となり、生き残つた人びとに励みにもたらえる、と僕は思った。

三十年來の敬愛する友、津田康さん（新聞記者、神戸で被災）らが、震災と遺児とあしなが運動を本にまとめては、と強く奨めてくれた。が、あしなが育英会では、その四日後に遺児に奨学金特例措置を決めるや、次々と現実的対応を迫られた。遺児学生ボランティアを中心に、激励募金、遺児捜しローラー調査、有馬温泉への招待、遺児作文集の発行、あしなが学生募金、ボランティアウォーク、激励金の配分と、全力疾走の連続の四カ月だった。会では、四月には神戸事務所を開設し、決して充分とは言えない中から職員を二人割いた。

そして八月の海のことい。乱暴になり、いら立ち、無口になる子らの変化は気にはなつたが、冒頭の絵で決定的な衝撃を受ける。訪問調査では遺族一人ひとりが背負うさまざまな負の遺産と、根深く癒されがたい心の傷を直視させられ、念を押され、出版を決意した。

ビルが建ち、区画整理が進み、神戸の街が復興すればするほど、この子らと親たちは忘れられ、孤立化していくことを憂う。僕には、オウム一色のマスコミが、阪神大震災を集中的に取り上げるのは、震災から一年、一九九六年一月で終わるのでは、という予感と焦りがある。

親たちの一周忌にこの遺された子らの将来をみんなで本気で考えてほしい。祈る思いでこの書を出す。そしてもう一人の主役だったボランティア。幾千人のボランティア学生達の行動はすぐれて人間的な「ボランティア元年」の先駆者だったし、彼らの仕事は行政を超えた。お金と励ましを子らに惜しみなく降り注いでくださった、軽く一千万人を超えるボランティア市民（寄付者もボランティアだ）のことも特筆して記録に残したい。僕らあしなが育英会も黒子に徹して三十年間のノウハウを駆使して奮闘した、と自負している。

阪神大震災関連の多くの書物の中で、この本は震災最弱者の実態を克明に調査した貴重な記録書である。六千人を超える震災犠牲者の中で、愛する親を失った子ら、また愛する子、夫、妻らを喪失した親たちの悲痛な心の叫びを綴ったものであるからだ。あまりにも重く読むのはつらいが、一人ひとりの死を凝視し、遺された者の心底からの呻きに耳を傾けていただきたい。

なお、実態調査のケース紹介についてはプライバシーを守るため、氏名、年齢、家族構成、職業、住所などは変えたり、ぼかしたりしたが、あとは事実にして忠実にまとめた。

では、まずはプロローグのかわちゃん一家の物語からお読みいただきたい。

秋元家の長いトンネル

あしなが育英会神戸事務所所長代理

樋口和広

剛君の留守番電話

「ウンコ、ウンコ、ウンコ、ケツくさい、くさい、くさい、くさい！(ピーツ)」

秋元一家の様子が気になって、電話を入れたのは九月二十二日。留守番電話のメッセージには長男の剛君(十二)の声で下品な言葉が約三十秒間、録音されていた。私は一瞬何がおきたのかわからなかったが、時間がたつにつれてやるせない気持ちに包まれた。

一体何があの子にそうさせるのか。それまでも少々荒れている様子があつた秋元家の子ども達。ポランティアの遺児学生らと心のケアのための訪問を繰り返し、一緒に遊び、話し合ったりしてきた。時には私自身が小学校一年の時に父を交通事故で亡くしたことを話し、一緒にがんばろうと声もかけた。

あの子達の前では三十歳という自分の年齢も忘れて大はしゃぎをし、イタズラをした時には遠慮なく叱り飛ばした。彼らは「樋口のおっちゃん」と呼んでくれるようになり、震災直後に出会った時よりもとびきりの笑顔で迎えてくれるようになった。しかし、あの子らが抱える、深く大きな心の傷の前には、あまりにも微力なものであつたのだ。電話のメッセージが頭の中でこだまするたびに、言いようのない虚しさに襲われ、言葉を失った。



秋元ちびっ子ギャング団と樋口。左から剛士君、樋口、雄仁君、竜二君、母清美さん。

あの子らの異変に気がついたのは八月八日、兵庫県の香住町^{かすみ}で「第二回震災遺児を励ますつどい」(通称、香住のつどい)を開催した時だった。貸切りバスから下りてきた剛君は、丸縁のサングラスをかけ、ポケットに手をつ突っ込んで、肩で風を切って歩いてくる。その後ろで次男

の雄仁君^{かつひと}(十二)と双子の弟、剛士君^{たけし}(十一)、四男の竜二君(九)が真似をしながら続く。私の前にきてサッと右手を挙げ、

「おう、おっちゃん！ 生きとったんか」

とても小学生の仕草とは思えない。まるでちびっ子ギャング団だ。

その日の夜、初めてのプログラムはゲーム大会。三十人の子供たちと二十人のボランティアが四班に分かれて、ムカデ競争やフォークダンスを楽しんだが、秋元家のギャング達はまったく言うことをきかない。特にボスの剛君は、進行役のボランティア学生達に、

「お前、アホとちゃうか」

などと罵声を浴びせて喜んでいる。ゲームを抜け出し

てはボール遊びをし、收拾がつかない。学生はギャング団のわんぱくぶりに、ほとほと困りはてた。三月にも同じようなつどいを有馬温泉で催したが、彼らはその時よりも明らかに乱暴になつていた。

もちろん異変を感じたのは秋元家の子供たちだけではない。ゲーム大会が始まる前、ある子が私に向かつて、

「あつ、ブタゴリラや」

と叫ぶと、子供たちは一斉にかけ寄つてきて、パンチやキックを浴びせてきた。

「やめんかッ」

と怒鳴つても、逃げてもまったく動じない。しかも、力いっぱい蹴ってくる。いくら子供とはいえ、集団で思いつきりやられたのではたまらない。

でも、そのパンチの中に、あの子らの親を亡くしたやり場のない悲しみと、親戚の家で、い子にしてなさいと抑えつけられ、引越して友だちを失つて遊べない子供たちのストレスII心的外傷後ストレス障害（PTSD）を感じた胸の痛みの方がもつと痛かった。

カメラを見ただけで腹が痛いとい仮病を使う子や無気力で何もしたくないという子もいた。

民宿に戻つてからも、秋元ギャング団のやんちゃぶりは止まるところを知らず、廊下を走り回り、代わる代わる私の部屋へ来ては大声で、

「ブタゴリラ！」

と叫んで逃げる。深夜まで民宿は蜂の巣をつついたような状態だった。

ポランティアで手伝いに来てくれていた岡本辰雄さん（大阪市教員・四十三歳）が、騒ぎを静めるためにギャング団の部屋へ行った時のことである。剛君が雄仁君を指さして、

「おっちゃん、こいつな、九時間埋まっとってん」

と地震の話始めた。

「うちの親父は五時間埋まっとって、死んどってん。でも、こいつは九時間も埋まっとってたくせに助かりよってん」

雄仁君は申し訳なさそうに下を向いたままだった。

地震の時、中央区に住んでいた秋元家では一家八人が生き埋めとなった。一時間後に剛士君と長女の和美ちゃん（十五）が助け出され、剛君が救い出されたのは四時間後。父親の茂雄さん（当時三十九）が遺体で発見されたのは五時間後だった。

剛君は、大好きなお父さんを亡くした悲しみを他の兄弟きょうだいにぶつけてしまう。以前にも和美ちゃんに、

「俺より先に助け出されたくせに、何もしてくれへんかった」

と責めたてたことがあった。岡本さんが、

「ええやん、何でアカンねん。お前、お兄ちゃんやのに、そんなこと言うなよ」

と言うと、とぼけて話題を変えようとした。

実は、剛君にもわかつているのだ。しかし、いまだに悲しみを消化しきれずに、その思いをどうすればいいのかわからないのである。

人は心に傷を受けた時、それを表現することで傷を癒^{いゆ}そうとする。泣くのも心の内を話すこともそういった心の働きによるもので、時には暴力をふるうことさえもある。それが剛君の場合、兄弟に八つ当たりをすることなのだ。当然本人はそんなことには気づいていない。知らぬうちに剛君の幼い心が懸命に傷と闘い、癒すために彼にそうさせているのだ。もちろん、雄仁君達への影響を考えると改めさせねばならないが、剛君の心の闘いは誰にも責めることができない。

ふだんはボスとして弟たちの面倒もよく見る剛君。が、それだけに剛君の影響力は大きく、彼の傷が他の兄弟をさらに傷つけていくという皮肉な結果を招いている。

かっちゃんの心にかかる「黒い虹」

震災後、秋元家の五人兄弟の中で、最も様子の変化が大きいのは雄仁君と剛士君だった。もともと五人兄弟の中では二人とも体つきは小さく甘えん坊で、とても小学五年生には見えなかった。その性格は優しく、どちらかというと気の弱い子達だった。双子の二人は、見かけも性格もそっくりで見分けがつかない。少し吃音になってしまいう話し方もそっくりだった。ところが今は、目つきや言葉づかいですぐに見分けがつく。剛士君は、剛君の影響かその行動は荒々しくなっていた。以前はイタズラを注意すると、泣きそうな顔をして、ごめんなしやいと謝っていたが、今は、「うるさいな、ほっとけブタゴリラ！」

会うといつも、

「おい、お菓子おごってくれ。ジュースを買え」

とふてぶてしく何かをねだる。

「何や、その口のきき方は！」

「やかましい！ ほないらんわ」



明るく振舞ってはいても雄仁君（左から2人目）の心の傷は深い。

とがなりたてて、蹴りを入れてくるようなわんぱく坊主になった。

一方、雄仁君は以前にも増して弱々しくなった。一緒に歩く時には、必ず手をつなごうと言つて甘えてくる。話す時は赤ちゃんのような言葉を使い、いつも手足をバタつかせて体をくねらせながら話す。はしゃいでいる時の言葉は普通なのだが、一対一で話す時には言葉が吃音になってひっかかる。英語の無声音のように、ヒュー、ヒューと空気だけが出て、声になるまでかなりの時間がかかってしまう。吃音の癖は震災前から少しあつたが、なぜか雄仁君だけが、ひどくなつていた。作文には、

「学校でもだちに、よくどつかれ、いじめられます」

とある。今の学校に転校してからいじめにあつてゐるようだ。吃音も原因の一つらしい。

後ほど東大医学部小児科外来医長の中村安秀氏にそのことを話したら、強い恐怖心などが原因で吃音がひどくなるのが考えられるという。その時、二人の変化の差は被災時に埋まつていた時間の長さによるものだと直感した。剛士君は八人の中で最も早く、一時間後に救出されたが、雄仁君は一番最後。九時間も暗闇の中で下敷きになつたままだつた。

実は、雄仁君の救出が遅れたのには理由がある。被災現場では救出部隊の人手は絶対的に不足していた。そこで取られたのが「呼びかけ作戦」だ。埋まつてゐるとわかつていても、呼びかけて返事がなければ救出作業はされない。できる限り生存者を優先して救出する苦肉の策だ

った。それが雄仁君救出の遅れの原因となったのである。

十月になって雄仁君から聞いたのだが、家の下敷きになっていた雄仁君の耳には、はっきりと母清美さん（三十六）の声は聞こえていた。なぜ返事をしなかったのかと尋ねると、

「ウー、ウー、こ、こ、怖くて……、ヒュー、ヒュー、こ、こ、声が出なかった」

と、体をバタつかせながら答えた。突然の激しい揺れで体の上に天井が落ち、いつまでも闇が晴れない。その恐怖は雄仁君に泣くことさえも許さなかったのだ。救出された時も、目をむいて震えるだけだったという。

思わず、彼を力いっぱい、ギュッと抱きしめていた。雄仁君が痛がる声で我に返った。雄仁君の恐怖体験をまったく知らなかった私は、香住のつどいで彼が出したSOSを見落としてしまっていたことに心から申し訳ないと思った。

つどいでトーマスポールを作った時のことである。子ども達に白く塗った板を渡して、好きな絵や言葉を描いてもらった。用意した色は赤、白、黄、緑、青、黒の六色。みんな思い思いの彩りで描いていく。これは、つどいの記念に何かを残していつでもらおうと香住町の「ポラントイア2000」（代表・谷口公一）の人たちが企画し、準備してくれた。

雄仁君は白い板を真っ黒に塗りつぶし、夜空にかかる虹を描いた。使われている色は黒、青、緑、黄色の四色だけ。最初は虹の中央には赤い虹が描かれていたが、なぜかそれも黒く塗りつ

ぶざれていた。それが九時間も閉じ込められていた暗闇を表すのか、または肉親を亡くした悲しみを表しているのか、それともいじめにあっている暗い心に一生懸命希望の虹をかけようとしたものなのかはわからない。

東京のあしなが育英会本部職員がトーテムポールの写真を見て、

「この絵はおかしいぞ」

と、言ったのを聞いて、はじめて異常さに気づいた。

よく見るとSOSを出しているのは雄仁君だけではない。スイカ割りの絵を描いた少年は、黒いスイカと黒い棒を描き、人の輪郭だけを黄色で描いた。その絵は二時間かけて描いたとは思えぬほど簡素で、無気力なものだった。また、別の少年は、

「天災は忘れたところにやってくる」

と書き、その横に一回り小さな字で、

「大震災を忘れない」

と書いた。

かっちゃんを描いた『黒い虹』をもっとよく理解しなければ、そう思った。その背景を知り、雄仁君の心の内を考えることが震災遺児の抱える問題を理解することであり、解決の糸口になると思った。以来、秋元家によく電話をかけることにした。

破れた幸せの絵

十月七日、久しぶりに一家を訪ねた。前日に電話をして雄仁君と会う約束をしたが不在だった。和美ちゃんが、たぶんゲームセンターちゃうかな、と教えてくれた。ゲームセンターは近くのデパートの中にある。探しに行ったが見当たらない。店員に雄仁君の写真を見せると、

「あー、この子か。ずいぶん前にはお金をたくさん持って来てたけど、最近は見んなあ」

と教えてくれた。たぶん剛士君のことだろう。当てがはずれた私はデパート中を探したが見当たらないので、母子寮に戻った。待っている間に保母さんに秋元一家の様子を聞いてみた。

すると剛士君が前よりわんぱくになったこと、和美ちゃんと剛君が大ゲンカをした話に混じって気になる言葉が返ってきた。

「ちよつとお母さんが疲れ切ってるっていうか、子育てできる状態じゃないわ」

どうやら清美さんが雄仁君と剛士君にあまりいい感情をもっていないらしい。奥歯に物をはさまったような言い方が気になったので、清美さんが帰ってくるのを待つて、それとなく聞いてみた。

「どうですか？ 少しは落ち着いた？」

「まあ、ぼちぼちやねえ」

ふだんは自称「男みたいな女」と言うだけあって、子供たちを叱りつける姿はまるで肝っ玉

母さんだが、震災のことになると涙があふれてくる。三月に会った時もそうだったが、亡くなったご主人の茂雄さんと次女の幸絵ちゃん（当時八）のことになると、もうどうしようもないほどシユンとなる。

茂雄さんと知り合ったのは中学校時代。家庭の事情で沖縄から転校してきた茂雄さんは、清美さんの兄と同学年で、よく家に遊びに来ていた。当時は挨拶を交わすくらいやった、という。二人とも経済の高度成長時代に「金の卵」として社会に出、会う機会もなくなったが、清美さんが十八歳の時に再会、二十一歳で結婚した。

茂雄さんは土木作業員。震災当時の住まいは六畳二間の文化住宅、関東という木造アパートだ。家賃は月三万円。毎朝五時前に起きて六時に仕事に出かける。清美さんはお弁当を作り、幸絵ちゃんと送り出す。決して裕福な家庭ではなかったが、清美さんはその朝のひとつに、子どもと一緒に愛する人を見送る幸せを感じていた。

「いってらっしゃーい、気をつけてなあ」

「おう、あとは頼んだで。幸絵もええ子にしときやあ」

幸絵ちゃんは六人兄弟の中でも一番素直で朗らか。勉強もよくできた。清美さんがはじめて名をつけた子どもで、その名前には「幸せを描いた絵」に出てくるような子にという願いが込められていた。

あの日の朝も、見送る前のひととき、いつものように三人でコーヒーを飲んでいた。そこへ地震が襲ってきた。最初は軽い揺れで、茂雄さんは、ちょっと見てくるわ、と電気ブレーカーのスイッチを切りに玄関へ。すぐにおさまるやろうと思っていたが、その途端に思いもよらぬ激しい揺れが起きた。ゴゴゴオツと地鳴りがしたかと思うと、ザーツという音とともに頭の上に砂が落ちてくる。まるでミキサーの中にいるみたいにタンスが倒れてくる。清美さんは、

「あんだ、危ないからこっちへ入りっ！」

と叫んだが、崩れ落ちてきた家はその言葉ごと、一家八人を丸飲みにした。

どれくらい揺れていただろうか。意識はもうろうとし、気づくと真っ暗で何も見えない。ただ清美さんの手には、小さな幸絵ちゃんの手が触れていた。まだ温もりがある。幸絵ちゃんと呼んだが返事はなく、その手は小刻みに震えるだけだった。しばらくして、死後硬直のせいかもしれないで、

「お母さん、もういいよ。さようなら」

というように、手はすうっと引いていったという。

剛士君、和美ちゃん、清美さん、剛君、幸絵ちゃん、竜二君の順で引き出されたが、幸絵ちゃん、すでに冷たくなっていた。茂雄さんと雄仁君は呼びかけても返事がない。救出部隊から、これ以上は危ないし、返事もないからと打ち切りが言い渡された。

「何でやねん！ あんたらがやらへんねやったら、うちが一人でもやったるわッ！」
幸絵ちゃんの遺体が発見されてから、清美さんは半ば狂乱状態だった。

「あんなにええ子が……、なんでこんな目にあわんといかんねん！」

その場に泣き崩れた清美さんを見かねた隊員が救出作業を続行してくれた。茂雄さんの亡骸なきがらが見つかったのが昼近く。残った雄仁君は半分あきらめていたが、奇跡的に頭に軽いけがをしていただけで助かった。その時、もう日はかなり西に傾いていた。

清美さんは震災後、悲しみを癒す間もなく五人の子達を育てていかなければならなかった。運良く母子寮が見つかったものの、収入は途絶え、お葬式の費用さえない。子ども達もストレスからか言うことを聞かない。茂雄さんの真似をして、コラツと怒鳴りつけ、頭をポカリとやるが、まったく効き目がない。

自分一人の時間もほしいのだが、毎日落ち着く暇がなく、戦争のような生活を送っていたという。六月から近くの町工場でパートが見つかり、やっと収入を得られるようになったと喜んでいた矢先、七月、子宮筋腫で倒れた。子宮を摘出し、職も失った。通常でも女性が子宮を摘出する時にはかなりの精神的負担を伴うと聞く。愛する夫と娘を亡くした悲しみだけでも計り知れないものがあるが、その上女性としての誇りも失った悲しみは想像を絶するものがある。

それでも育ち盛りの子どもを抱えて生きていかねばならない。金もなく、震災から数カ月後

に市から配付された見舞金の五百万円も半分以下になってしまった。

「子育てはどう？」

「五人はしんどいわあ。お父さんが亡くなってから子供が言うこと聞かんようになってね。特にあの双子の子らは私になついてないねん」

茂雄さんの生前には、子育ての分担が暗黙の了解としてあった。六人のうち清美さんが和美ちゃんと幸絵ちゃんと竜二君、剛君と雄仁君と剛士君は主に茂雄さんが面倒を見ていた。

もちろん、実の子を分け隔てなく育てなければ、ということはおわっているものの、理想通りにはいかない。つい手が焼ける二人にはきつい言葉を浴びせてしまう。

「あんたらが、幸絵ちゃんと代わってたらよかつたんや！」

いつも、保母さんに、

「そんなこと言うたらアカンで」

と注意されてハツとする。しかし、また二人が聞き分けのない行動を起こすと、頭に血がのぼって、自分でもわからないうちに口走ってしまうという。

東大の中村外来医長は、こう語る。

「双子の場合、保育器に入っている時間が長いので、母親が先に退院する。そうなると家族はその子らなしでの生活をはじめ、母親もそれに慣れる。ようやく落ち着いたところに子どもが帰

つてくる。そうすると母親は、自分で気づかぬうちに双子を敬遠してしまうことがあるんです」
しかも秋元家の場合、心的外傷後ストレス障害に起因するもの他に、家族に問題が生じた時、家族間の力関係が顕在化し、はけ口が最も力の弱いものに向けられてしまう結果になる。

雄仁君の『黒い虹』を思うと、独身男性の私は、単純にもっとしつかりしてと清美さんを励ましたくなるが、お子さんをお持ちの方ならば、いかに五人の子を育てていくのが大変かはおわかりであろう。しかも、その上に夫と娘を失い、収入は途絶え、生活環境は一変し、健康も損ねてしまった。現時点で清美さんに母親の責任を求めるとしたなら、それはあまりにも酷だ。

秋元一家のくぐるトンネル

「これからのことを考えると、いつまでも皆さんに甘えてるわけにもいきません」

九月から、清美さんは子ども達のためにまた働き始めた。今度は建設現場の清掃作業のアルバイトで時給は千円。男性に混じっての仕事は肉体的にも精神的にも大変だが、職のない被災地ではぜいたくは言っていられない。育児、家事を背負い、体の調子を考えながらなので毎日働けない。清美さんにとっては、そんな自分が雇ってもらえるだけでもありがたいことなのだ。

はじめてもらった給料はわずか五万円。一方かかる生活費は月三十万円以上だ。母子寮なの

で家賃はタダだが、光熱費と食費は自己負担。中でも食べ盛りの子達の食費は削ろうにも削れない。来年は和美ちゃんが高校へ進学する。そうなると学費もばかにならない。しかも、今は大半の中学生が通っている塾にも通えず、震災で勉強どころではなかった和美ちゃんには、公立高校はむずかしいようだ。先生に言われて私立高校にしばった。末っ子の竜二君が高校を卒業するまであと十年。うち三年間は三人の子が高校に通う時期が続く計算になる。

「それまで体が持ってくればええねんけどねえ」

清美さんの声が細くなり、溜め息が出る。ましてや、自分の老後などまったくわからない。周囲の人は簡単に、それなら、再婚すればと言うが、そんな気には到底なれない。無神経な言葉に傷つく。

清美さんの唯一の救いは、最近、少しずつだがお父さん達の思い出を家族で話せるようになってきたことである。あの時、お父さんすごく怖かったよねとか、あの時は楽しかったと大笑いしながら話せることに、わずかな希望を見いだそうとしているのが痛いほどわかる。

しかし、震災遺児たちは交通、災害、病気など、他の遺児と比べて、あまりにも悲惨な肉親との別れを体験し、深く傷つき、家も職も失って補償もケアも少ない。しかも、その存在は人々の記憶の中から急激に消え去ろうとしている。

これから、秋元家がくぐらねばならない長いトンネル。その出口はまだまだ見えない。

黒い虹・もくじ

喪失体験の悲痛な心の叫び　あしなが育英会会長代行　玉井義臣　3

秋元家の長いトンネル　あしなが育英会神戸事務所所長代理　樋口和広　6

第一章　死んでお写真になったんよ　27

ともだちでできたヨ²⁹　死んでお写真になったんよ³⁰

わが子を抱えて埋まったまま、炎にのまれた妻³²　おまえらばかりええのん³⁴

おりこうにしてたら、ママ帰ってくる？³⁶　本当に悪かった³⁸

一人死ぬも三人死ぬも一緒やツ⁴⁰　楽しいこと、見つけなあかん⁴²

火事や火事や、ぬくいなあ⁴⁴　娘の最期の蹴り⁴⁶　現実見つめてください⁴⁸

とつてもくやしい⁴⁹　自分の子と同じに扱えない⁵⁰　私が死んでいたほうがよかった⁵²

僕らのお金で学校これとんやで⁵⁴　お母さんが死ねばよかったんだ⁵⁶

ごめんなさいお父さん⁵⁸　もう食えない手料理⁵⁹

いろんなことを避けるから生きていける⁶⁰　八千万円が八百万円になってしもた⁶²

呻きとともに返事がなくなり⁶⁴　また泣いとん、なんで泣いとん⁶⁶

「笑顔」で死んだ父さん⁶⁸　よう見とつてや⁶⁹　死んだら、あかんなあ⁷⁰

自立可能な人たちは自立すべし⁷¹　お父さんにもらった命、がんばらなあかん⁷²

短くても中身の濃い人生や⁷³ 小さな心も傷ついて⁷⁴ もう、しんどい、ポロポロです⁷⁵
子どもの頼もしさに支えられて⁷⁶

第二章 死ぬしかないんかな? ⁷⁷

安らかに眠ってください⁷⁹ 死ぬしかないんかな?⁸⁰

女っ気がないって寂しいもんやな⁸² 一瞬先は誰にもわからない⁸⁴

別居していた妻に死なれて⁸⁶ 女手一つで育ててくれた母はもういない⁸⁸

板の上で動かぬ母⁹⁰ 三十円を貸してくれなかった警察⁹²

「がんばってね」と言わないで!⁹⁴ あの場所にいつか僕が家を建てる⁹⁶

一流大学に入れる夢、かなえます⁹⁸ みんなに負けないぞ¹⁰⁰

進学の夢あきらめない¹⁰¹ 仕事の後の家事はやはりかなりきついぞ¹⁰²

預けておいた病院に遺体はなかった¹⁰⁴

籍が入ってへんかったら夫婦と違うんか!¹⁰⁶ 元氣やったのにクラッシュ症候群で¹⁰⁸

引き取った姪が私のエネルギー源¹¹⁰ 本当は先生になりたい¹¹²

お空から見守っていて¹¹³ 十日後に知らされた夫の死¹¹⁴

人間って死んだら物みたい¹¹⁶ 自分の死どう受け止めてるの?¹¹⁸

ママを頼んだぞ¹²⁰ 一月十七日絶対忘れない¹²²

ショックで心臓が止まって¹²³ 三つの病院を行ったり来たり¹²⁴

三人のこと絶対忘れたらあかん¹²⁵ もう一度人生やり直さないと¹²⁶

どうしようもできなかった¹²⁷ 近所づきあいて大切だけど¹²⁸

第三章 お父さんと弟が命をくれたん 129

死にたかった¹³¹ お父さんと弟が命をくれたん¹³²
ああ、この苦しみから逃れられる¹³⁴ 娘がいたからがんばれた¹³⁶
生活が根底から変わってしまった¹³⁸ 生きていかなきゃ¹⁴⁰
肝心な時に助けてやれなかった¹⁴² 母親が生き残った方がなんぼかよかった¹⁴⁴
平凡な幸せがほしかった¹⁴⁶ お金の恐ろしさを感じた¹⁴⁸
ゴトゴトさんがつれていったの¹⁵⁰ ガイコツに追われたゆめ¹⁵¹
ああ、もうダメなんだ¹⁵² 仏さんになってしまえばしょうがない¹⁵⁴
電気をつけてないと眠れない¹⁵⁶ 無念の涙¹⁵⁸ 今でも信じられない¹⁶⁰
写真の中だけのお母さん¹⁶¹ 自立しなければ¹⁶² 苦しい、はさまれた…¹⁶⁴
信じたくないんですわ¹⁶⁶ 早く出さんと燃えてしまう¹⁶⁸
待って、待って、待って、待って、待って¹⁷⁰ 負けてたまるか!¹⁷²
国も県も市も株式会社なんやろか?¹⁷³ 子ども達を残してくれてありがとう¹⁷⁴
心臓マッサージを知らなくて悔しい¹⁷⁵ みんな普通じゃなかった¹⁷⁶
助けられたんじゃないだろうか¹⁷⁷ 震災ではケガ一つしなかったのに¹⁷⁸

第四章 一緒に逝きたい 179

二人だけの「だんじり」¹⁸¹ 一緒に逝きたい¹⁸² 小さいモコモコと大きいモコモコ¹⁸⁴
なんでうちだけ¹⁸⁶ お兄ちゃんは大黒柱や¹⁸⁸ 埋まったままで大いびき¹⁹⁰

一日も早く、元の神戸に¹⁹² オレはもうダメや¹⁹⁴
ああすればよかった、こうすれば助かった¹⁹⁶ 母との約束を果たしたい¹⁹⁸
三本の矢²⁰⁰ 大人にならなあかん²⁰² 夢に笑ってでてきてね²⁰³
無惨な主人と息子の姿²⁰⁴ 七カ月の子の恐怖体験²⁰⁶ 弟を進学させたい²⁰⁸
母の死をどう伝えたいのか²¹⁰ 声も聞こえないまま²¹² たった一枚の写真²¹³
治らなくていい、パパとママのここに行く²¹⁴ 殺すんか、助けるんか²¹⁶
すべてを投げ出したい²¹⁸ 僕らが一緒なのを忘れないで²²⁰
父の命とひきかえに²²² 地震で変わった価値観²²³ 何も返すことができなかつた²²⁴
生きてさえいてくれたらええのに²²⁶ 私より不幸な人、おらんかな²²⁷
前向いていかな、しゃあない²²⁸ 僕が母さん殺したん？²²⁹
つらいのは当然なんよ²³⁰ 地震を体が覚えてる²³¹ 優しい人や友達に支えられて²³²
²³³

第五章 日々深まる心の傷——インタビュ——調査分析報告 筑波大学副学長 副田義也 233

第六章 あしながファミリー神戸日記 249

第七章 ボランテニア奮闘記 267

人生観を揺さぶる学びの場 大阪ボランテニア協会理事事務局長 早瀬 昇 268

本当の悩みが聞けるまで²⁷³ しようもないヤツだった²⁷⁴

同じ遺児だから言える²⁷⁶ 貧乏人はボランティアもできない²⁷⁸
じっくり気長にボランティア²⁸⁰ 悲しみをさらけ出せる環境づくり²⁸²
神戸で教師になりたい²⁸⁴ 運動会に一緒に出てくれへん?²⁸⁶
震災遺児の SOS を見落とすな²⁸⁸
やればできるということを感じ²⁹² 神戸に、ありがとう²⁹⁴
この目で見ても、肌で感じたい²⁹⁵ この子らをほうっておけない²⁹⁶
被災者の側に近づきたい²⁹⁷ ボランティアは特別なことではない²⁹⁸
震災も弱者を差別している²⁹⁹

阪神震災遺児救援の軌跡 300

第八章 レインボーハウスの設立をめざして——あしなが育英会の実績と展望 303

喪われた愛は愛でしかうめられない あしなが育英会会長代行 玉井義臣 304

あしなが育英会の奨学制度について 315

監修者の言葉 筑波大学副学長 副田義也 316

黒い虹がかっちゃん達 (口絵)